

Economics in My Life-Going through Turbulent History

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27741

経済学と私

—— 激動の歴史とともに歩んで ——

上 条 勇

はじめに

本稿は、2009年9月5日に、石川四高記念文化交流館で私が行った還暦記念ミニ講演の原稿を、若干の修正の上発表するものである。還暦を機会に、私は、これまでの30数年にわたる我が研究人生を振り返るとともに、今後の研究課題を改めて考えてみることにした。なお、本稿末尾に「上条勇研究業績リスト」を掲載することにした。

講演の構成

- (1) 北大教養部の頃
- (2) 森ゼミとヒルファディング
- (3) 私の研究について
- (4) 第一次石油危機と大学院時代の一エピソード
- (5) 金沢大学への赴任と教養経済学担当
- (6) ジャパン・アズ・ナンバーワン
- (7) 夢はバブルとして消える
- (8) 社会主義の崩壊と1990年代
- (9) 現在から未来へ

(1) 北大教養部の頃

この5月、金沢大学経済学類の1年生全員を前に、君たちは「どういう理由から経済学類を選んだのか、その動機は何か」と問いかけました。そして、多

くの諸君が経済学を学びたいともさほど思わず、経済学に関して明確なイメージを持っていないのではないかと挑発的にも述べました。ところが、正直なところ、かく言う私こそ、経済学を学びたいという目的意識を持って北海道大学(以下北大)に入学したではありませんでした。入学時、当時の北大の文科系は文類において大きく括られ、教養部2年間の成績にもよりますが、文学部、教育学部、法学部、経済学部のうち好きな学部に移行できました。入学時には、移行先は文学部かなと漠然と思っていました。それが何故経済学部にも所属してしまったのか、まずその話から致します。

その理由はいくつかあったのですが、何よりも当時の時代的な雰囲気をあげなくてはなりません。私が入学した当時の日本は、大きな歴史的転換点に向かっていました。つまり、高度成長から低成長への時代の転換で、高度成長末期には、社会保障・福祉の貧しさ、公害など様々な社会矛盾が噴出し、何のための経済成長かが問われはじめていました。当時の新聞の特集記事のタイトルに「くたばれ! GNP」というものがあつたほどです。入学してすぐに講義室に学生運動家がアジりにきたのを覚えています。全国では大学紛争がテレビのニュースに映し出されており、北大でも1年遅れて北大紛争が起きました。教養部2年目は建物が封鎖され、1年間まったく講義が行われませんでした。私は、学生運動家の主張の根拠がマルクスの『資本論』にあると考え、この余暇を利用して、『資本論』全巻を読破しました。当時の抜粋ノートを今も段ボール箱にしまっていますが、マルクスはここが間違っているという書き込みでいっぱいです。このマルクス批判を学生運動家にぶつてみましたら、「おまえは創価学会か」と言われました。それはともあれ、『資本論』を読了した私は、経済学をもっと深く学びたいと思い、経済学部への移行を選びました。

(2) 森ゼミとヒルファディング

現在の多くの経済学部と同様に、当時の北大経済学部でも、多くの学生は経済学を学問的に深く学ぶような雰囲気ではありませんでした。当時経済学部はヒマ経と言われ(学生の話では、今日バラ経、すなわちバラダイス経済学

部という)、北大周辺にあったパチンコ屋とか麻雀屋ではいつも経済学生がゴロゴロいるという話でした。そんな中で私は変わり種だったのかもわかりません。

経済学部で、私は、森杲先生の専門ゼミへの所属を選びました。森先生はアメリカ資本主義史の専門家であり、先生のその後のゼミのテーマからは異例のことでしたが、学部移行時「帝国主義論史」をゼミのテーマとして予告していました。『資本論』を読破した私は、『資本論』と現代の現実の間にギャップを感じ、マルクス以降に関心を移しはじめていました。19世紀末から20世紀初頭にかけて、資本主義は大きく変貌をとげ、いわゆる自由競争の時代から少数の大企業の支配(独占体制とか寡占体制と言う)の時代に移行しはじめていました。これと結局は第一次大戦(1914年)に行きつく当時の植民地争奪戦とを結びつけて、新たな資本主義を理論的に解明することが、マルクス以降のマルクス主義者たちの課題となり、こうして帝国主義論の諸学説が生まれました。今日マルクス経済学は冴えなくなっており、日本の若手経済学者のその理論研究は壊滅的な状況になってきていますが、帝国主義論の諸学説は結構創造的な内容をなしていました。

私は、帝国主義論の諸学説のうち、『資本論』との関係を考えて、我が国では現在あまり名前が知られていませんが、ルドルフ・ヒルファディングの『金融資本論』(1910年)の報告担当を選びました。私が特に興味を覚えたのは、自由競争から少数大企業の独占(寡占)的経済支配への資本主義の歴史的变化を、ヒルファディングが『資本論』を発展させる形で理論的に説明している部分です。わかり易く言うと、『資本論』でマルクスは、無数の小企業による自由競争、その弱肉強食の競争が、結局、優勝劣敗の結果、自然淘汰をもたらし、少数大企業による経済支配を生みだしていくと将来を予測しています(私は、マルクスのいくつかの予測の内これは見事に当たったと考えています)。ヒルファディングは、これを理論的に精緻に論じています。独禁法があろうと、市場原理主義的に規制緩和しようと、少数大企業による経済支配は、歴史的に不可逆的であり、これは現代の日本において日々我々が目撃していることです。日本の自動車産業がトヨタ、日産、ホンダ、マツダ、三菱に支配されている事実は言うまでもありません。ヒルファディングは、この点で、大き

な理論的功績を残した人物として評価されます。

ヒルファディング報告のために調べている内に、私はある経済学史的な事実に突き当たりました。ヒルファディングは、第一次大戦と第二次大戦の間、ワイマール共和国のドイツで2回大蔵大臣、今日的に言えば財務相をつとめ、最後にはナチスのゲシュタポにつかまり、服毒自殺を遂げています。経済学史・思想史において『金融資本論』が高く評価される一方で、ワイマール期のヒルファディングについては評価が極端に低く、批判(非難)の対象でしかありません。私は、まじめに反ナチズム抵抗運動を行い、悲劇的な最期をとげていったヒルファディングが不当な扱いを受けていると感じました。そして、森ゼミでの報告終了後、『金融資本論』評価と中後期ヒルファディング評価の間にある、このギャップにふと疑問を覚え、調べてみることにしました。これが私のヒルファディング研究のきっかけをなし、それとともに現代資本主義論研究(ここでは第一次大戦以降の資本主義を現代資本主義と言う)に足を踏み入れていくことになりました。

(3) 私の研究について

森ゼミで『金融資本論』報告を担当した時、私は、ヒルファディングとこんなに長い付き合いになるとは夢にも思いませんでした。卒業論文(レフリー付きで4単位)、修士論文のテーマはヒルファディングであり、博士課程では、修士論文の各部分を精緻に仕上げ、「ヒルファディングの『組織された資本主義』論」という長大な連続論文を北大紀要の『経済学研究』に発表しました。これは、後に金沢大学教養部教員の応募に際して、主論文となりました。結局、私のヒルファディング研究は、1987年に『ヒルファディングと現代資本主義』(梓出版社)にまとめられましたが、これが博士論文となりました。私のヒルファディング評価の視点は、こうです。

ワイマール期におけるヒルファディングらの社会民主主義路線は、資本主義経済を管理できるという見通しのもとで、自由と民主主義の価値観を共有しつつ、結局、福祉国家への方向に資本主義を構造改革しようとしたのであり、これは現代の西欧社会民主主義と西欧の福祉国家の形成に向かう過渡的

思想をなしていた。

私は、当初は自由と民主主義を内容とし、市場を利用した分権的計画経済として先進国型の社会主義の可能性を探る一方で、しだいにですが、人間の当然の権利として人権・生存権・労働権を掲げ、労働諸条件の改善、福祉・社会保障の充実を目指す西欧の福祉国家を資本主義の発展史における一つの進歩型とみなすようになり、これとの関連で西欧社会民主主義の思想を評価するようになっていきます。この西欧社会民主主義は、ドイツ社会民主党 (SPD)、オーストリア社会民主党 (SPÖ)、スウェーデン社会民主労働党、イギリス労働党、フランス社会党等によって担われ、これらの政党の政権担当時代に西欧福祉国家を発展させています。フランス社会党出身のドロールは、1985年から1995年まで欧州委員会委員長(首相に当たるEUの地位)となり、EUのドロール時代を築いていきます。この時代にEUでは「資本主義のアメリカ」に対抗して「社会的ヨーロッパ」(福祉国家のヨーロッパ)が唱えられるにいたりました。ドイツとオーストリアを中心とした西欧社会民主主義の歴史研究は、現在の私の研究テーマをなし、これとの関係で私はEU論の研究にかかわっていくようになります。

(4) 第一次石油危機と大学院時代のエピソード

私が大学院に進学して早々、1973年秋に第一次石油危機という時代の変化を感じさせる事件が勃発しました。狂乱インフレが生じ、人々は、トイレットペーパーと合成洗剤を買いためるために、スーパーへと走りました。なぜトイレットペーパーと合成洗剤なのか、ちょっと首をかしげるところもありますが、当時ある総合商社で「千載一遇のチャンス、洗剤を隠せ!」という社内文書がまわされました。なかなか洒落つ気のある文書だと思うのですが、国会尋問で経営者が汗を拭き拭き答えている場面がテレビに映し出されていました。

翌1974年日本経済は、深刻な不況に襲われます。この年、私は修士論文を書いていたのですが、これをそつちのけで、実は初めてのデートを行いました。デートの成功を祈願して「再来」という名前の喫茶店を選んだのですが、

コーヒーを片手に、ついこう言ってしまいました。

「今回の不況は長引きそうだ。」

この予測は、幸か不幸かはずれませんでした。その理由は、ごく大雑把に言えば、第一に、オイルダラーが先進国の銀行に還流し、この膨大な資金が発展途上国に貸し付けられ、先進国の工業製品が大量に買われたことにあります。第二に、たとえば日本では、土光敏夫を会長とする経団連が、いやがる大蔵省を引っ叩いて、結局は新規国債発行が一般会計予算の3分の1に達する膨大な財政のバラマキを行った結果です。

(5) 金沢大学への赴任と教養経済学担当

1981年秋、私は金沢大学教養部に赴任し、教養の経済学を担当することになりました。北海道から金沢に移り住んだ時、その生態系の違いに驚きました。最初、古い家に住んだのですが、台所の引き出しを開けたら、赤いゴキブリがうじゃうじゃ出てきて、また夜電灯にカブトムシに似た大きな虫が飛んできてぱったり落ちたのを見ると、これまたゴキブリでした。北海道では、私は、ゴキブリというものを見たことがありませんでした(地球温暖化でゴキブリ前線は北上しているようですが)。

教養の経済学では、私はなるべく現実を例に取り上げて教えることにしました。当時話題となっていたのは、メキシコ为国家破産と日本の財政危機の問題です。私は、メキシコなど発展途上国の累積債務危機が、例の先進国銀行によるオイルダラーの貸出しと途上国の無謀な借入れにあることを説明しました。問題は、日本の財政危機です。当時、「親方日の丸」とか「官費天国」とか言って公務員が攻撃されました。国鉄労働者がとくにやり玉にあげられ、国鉄赤字の原因が「我田引鉄」といわれた政治家によるおらが町への赤字路線の誘致ではなく、彼らのせいにされました。そのせいで、電車をやり過ごすために保線作業員が腰かけているのを、子供が電車の窓から見て、「働け!」と言ったというエピソードも生ずる始末です。行革臨調が設置され、福祉・教育予算も削減されました。当時国家公務員であった私は、もろに給料と教育予算に打撃を受け、怒りを覚えつつ、当時「昭和の水戸黄門」ともてはやさ

れた土光敏夫行革臨調会長こそ、かつて経団連会長として財政赤字拡大をもたらした張本人であると指摘しました。これが、教養経済学1年目と2年目の講義の柱をなしました。

(6) ジャパン・アズ・ナンバーワン

1980年代は、私が教養部で経済学教育を修業した時代でした。1980年代前半は、日本の経済的パフォーマンスの良さが注目され、ジャパン・アズ・ナンバーワンと謳われた時代で、実に短かった日本のゴールデン・エッジでした。日本の経営システムが称えられ、「カイゼン」という言葉が国際語になった時代でした。私も教養の経済学講義の中で、日本的経営システムについてとりあげ、労働者を過労死へと至らせるその問題点を指摘しました。

1981年、アメリカでは、俳優出身のレーガン大統領が登場し、レーガノミクスと言われる一連の新自由主義(市場原理主義)的政策を打ち出しました。政府の経済的役割をできるだけ小さくし、市場に任せるという「小さな政府」論に基づき、社会保障予算を中心とした財政支出の削減、規制緩和、減税がその政策の柱をなしました。とくに金融規制緩和は激しい競争を生み、来店客にコーヒーを出すサービスをしたり、預金獲得のためにキャディラックを懸賞に出すという騒ぎでした。S&L(貯蓄貸出機関)など膨大な金融機関が倒産し、その処理のために、政府は巨額の公的資金を投入せざるをえませんでした。

減税について言うと、貧乏人に減税しても意味がなく、金持ちに減税すると、彼らはやる気を出して、活発に投資し、供給の側から経済を発展させるという理由をあげて、減税するとかえって税収が増えると言われました。レーガン減税を真似して、日本では中曽根税制改革が打ち出されました。貯金のマル優を廃止したり、金持ちに減税したり、法人税を引き下げたりするというのが、その内容をなしました。当時の大蔵省は、現実主義的にもさすがに減税＝税収増とは考えず、新たな財源確保のために消費税の導入を盛り込みました。

私は、次から次へと生ずる経済の現実的諸問題を講義の中に取り入れまし

たが、これは私の経済学的素養を高めるいい訓練になりました。

(7) 夢はバブルとして消える

1986年のある朝、女房が夫婦の会話で、「あなたNTT株を買おうかしら」と話しかけてきました。「やめとけ」のこの一言が、夫婦不和の原因となりました。NTT株に160万円の初値がつき、それがたったの2カ月で300万円を超える株価をつけた時、カミさんは山のカミに変貌しました。思えば、これが日本のバブルの引き金となった出来事でした。

「財テク」という言葉がはやり、お寺の坊さんまで「財テク」を行い、また銀行員が「地上げ屋」に変身する時代でした。1989年12月38,915円の最高値を記録した株式相場は「宇宙人相場」と言われました。バブルが崩壊した時、日本人のみんなは、何であんな馬鹿ことをしたのだらうと憂鬱な気分に襲われました。

私は、みんなが「金の亡者」になったということより、みんなを「金の亡者」にさせた政府の責任が大きかったと思います。第一に、アメリカのレーガノミクスの失敗の尻拭いとして、ドルの相場を維持する努力を日本政府が押しつけられた(1986年のG7の「ルーブル合意」という事実があげられます。アメリカが景気刺激策として金利を下げる中、ドル相場を維持するためには、日本の金利をアメリカより低く設定する必要がありました。つまり、水の流れとは反対にマネーは金利の高いところに流れ、そこでは為替相場を押し上げるという働きがあります。こうして日本政府は、2.5%という当時としては歴史的な低金利水準をずっと維持することになり、こうした超金融緩和は「カネ余り現象」を生んでいきました。この「カネ余り現象」は、カネの使い道として、株、土地、ゴルフの会員権、美術品の投機にむかったのです。また、第二に、政府は、財政再建と称して、自ら「財テク」に走り、バブルを煽ったのでした。たとえば、1987年10月19日のブラックマンディといわれた株の暴落を目にして、政府は、NTT株の第二次放出のために、証券会社の幹部を呼びつけ、NTTの株価を高く維持するように要請しました。

そしてある朝、夫婦の会話で、女房が「あなたNTT株を買おうかしら」とま

た話しかけてきました。私は、「やめとけ」と言って、今度は経済学者としての面目をほどこしました。嘘のような本当にあった話です。

(8) 社会主義の崩壊と1990年代

1990年代、日本は「喪われた10年」と言われる長期停滞に見舞われることになりました。私はこのことを気にする暇もなく、私の属する教養部の廃止(1996年廃止)をめぐる会議で時間をとられ、また旧ソ連、東欧の社会主義崩壊に注意を奪われていました。

1989年に「ベルリンの壁」が崩壊し、続いて中国で「天安門事件」が生じました。私は、当時、AV教材を取り入れた視聴覚教育を目指し、ビデオ編集装置を購入したばかりでしたので、大学に泊まり込んで、これらの報道特集を録画していました。

1990年に東西ドイツの統一、1991年に旧ソ連の崩壊と、世界史の転換がなされます。世界史のこの転換は、旧ユーゴスラビアの民族紛争など、「ナショナリズムの新時代」を思わせるような民族紛争頻発の時代を生みだしました。こうした時代的狀況をとらえて、経済学からは少々逸脱しますが、私は、民族問題の研究に立ち入っていきます。

時間をちょっと遡りますが、大学院の博士課程の末期から、私は、ヒルファディングの友人であるオットー・パウアーを調べはじめました。最初は、ヒルファディング研究を側面から支援する材料とみなしていたのですが、その内パウアー研究は私の重点的な研究テーマとなっていきました。パウアーは日本人のほとんどがその名前を知らないでしょうが、日本の新聞でも使われる「運命共同体」という言葉を生み出した人物です。つまり、パウアーは、民族問題の専門家でした。1990年代に入って「民族問題とナショナリズム」を研究課題として文科省(当時文部省)の科学研究費(科研費)補助金を連続して獲得できました。その研究成果が、私の主著とも言える『民族と民族問題の社会思想史』(粹出版社、1994年)でした。1996年には、学術振興会特定国長期派遣研究者として、パウアーの故国オーストリアにおよそ1年間海外研修に出かけました。そして去年の2008年から3年間の計画で「オットー・パウアーと

オーストリア社会民主主義」をテーマとして科研費補助金が当たり、これに基づき、去年に引き続き、今年も9月8日からウィーンとアムステルダムにある研究所に、海外調査研究に行っておりまいます。

(9) 現在から未来へ

去年の9月、アメリカのリーマン・ブラザーズが倒産し、リーマンショックが世界を走りました。麻生流に言うと、ミゾウユウの国際金融危機・経済危機が生じ、今も世界はこれに悩んでいます。私は、2006年に『グローバリズムの幻影——市場崇拜と格差社会の経済学批判』(梓出版社)を出版しましたが、その中で、金融グローバリズムが不安定な国際金融体制を生みだし、世界をカジノ化しギャンブルに巻き込み、繰り返し金融危機を招き、その度に公的資金の導入に頼らざるをえなくなると述べています。この指摘は、幸か不幸か、ずばりの中しました。

この著書の「はしがき」にも書きましたが、この著書は、同年前期に教養科目として行った経済学史入門の講義ノートを基にしたものです。実は、「何でも屋」のようなきらいがありますが、私は、1997年から「ヨーロッパ経済統合論」という専門科目を経済学部で担当しています。この著書を発表した年には金沢大学経済学部における経済学史のポストが空いていまして、私は、自分の本来の専門である経済学史・思想史を担当する機会が与えられたと思い、この科目を担当する上での準備的な作品として、この著書を発表したのでありました。

実際に私は、今年の後期から、ヨーロッパ経済統合論と兼任の形で経済学史の講義を担当しますが、これを機会に、経済学史を足場にして、大学院入学当時に勇ましくも思い描いた夢ですが、自己の現代経済学(現代資本主義論)を形成し、これに関する著作を何とか定年までに書きあげたいと願っております。

思えば、経済学研究を志して、私は、経済学理論と経済の現実の間を絶えず行き来してきて、狭い専門の枠にとらわれず、現代経済学の発展を自分なりに目指してきました。この研究は私の一生の課題であり、定年後も続けて

いきたいと考えています。

定年を5年後に控えて、経済学に関する私の思いを最後に述べておきますと、現在の経済では、金融危機とか財政危機、少子高齢化が取りざたされています。経済学者として私が専門技術的にこれらの問題に深く立ち入ると、国の借金(600兆円近く)の解消と財源の問題で、解決困難な状況に陥り、身動できなくなる——このような大変な問題です。こんな時は、ものごとを単純に考えることにしてはどうでしょうか。

今日、科学技術と生産力が高度に発展しており、「豊かな社会」にいたっていると思います。経済への関心も、エコロジー問題に移ってきており、経済と社会の「持続可能な発展」が専門の範囲を超えて唱えられるようになってきています。現在は、浪費をともなうほど物が有り余って、これが大量に売れ残って不況に陥っている状況です。有り余る物が存在するとすれば、これらを有効に利用して、老後とか病気の不安がない社会を実現できないはずはありません。我々は長い間日本の経済と社会を支えることに貢献してきたのであり、定年後は、使い切り用無しになった消耗部品のように扱われ、社会から切り捨てられるのではなく、第二の人生として悠々自適の生活を送る権利があると言わざるをえません。現代の「姥捨て山」が話題になるとすれば、世の中どこか間違っていると思わざるをえません。

派遣切りが取りざたされ、効率性と利潤を追求する厳しい競争が支配する社会と経済の現実から離れ、経済のももとの語源である「経世済民」に思い至り、ふとこう夢想してみました。

上条勇研究業績リスト

著 書

1. 『ヒルファディングと現代資本主義 —— 社会化・組織資本主義・ファシズム』梓出版社, 1987年
2. 『民族と民族問題の社会思想史 —— オットー・パウアー民族理論の再評価』梓出版社, 1994年
3. 『グローバリズムの幻影 —— 市場崇拜と格差社会の経済学批判』梓出版社, 2006年

共 著

1. 「ドイツ革命初期の社会化論争」(『労働運動と経済民主主義』<『労働運動史研究』63号>労働旬報社, 1980年)
2. 「オーストロ・マルクス主義とスターリン体制」(ヨーロッパ現代史研究会編『国民国家の分裂と統合 —— 戦間期ヨーロッパの経験』学文社, 1988年, 第6章)
3. 「パウアー」(丸山敬一編『民族問題 現代のアポリア』ナカニシヤ出版, 1997年, 第4章)
4. 「マルクス主義と民族問題 —— オットー・パウアー民族理論の再評価」(『ナショナリズムを読む』情況出版, 1998年<『情況』1992年1・2月合併号初出>)
5. 「ハプスブルク帝国とオットー・パウアー —— ひとつの帝国の終末論」(『国家を読む』情況出版, 2000年<『情況』1997年12月号初出>)
6. 「経済学の歴史」(経済学教育学会教科書編集委員会編『新時代の経済学入門』実教出版, 補論, 1998年)
7. 「R. ヒルファディング —— 帝国主義論から現代資本主義論へ」(太田一廣編『経済思想 6 社会主義と経済学』日本経済評論社, 2005年, 第5章)
8. 「EUにおける人の移動」(野村真理他編『金沢大学重点研究 地域統合と

人的移動——ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望』御茶の水書房、2006年、第3章)

9. 「オットー・バウアーとSPÖリンツ綱領——オーストロ・マルクス主義の再評価に向けて」(黒滝正昭他編『ポスト・マルクス研究』ぱる出版、2009年、第2章)

翻訳書

1. J.ブラウンタール著『社会主義への第三の道——オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義』梓出版社、1990年

共訳書

1. ヒルファディング『現代資本主義論』倉田稔・上条勇共編訳、新評論、1983年
2. オットー・バウアー『民族問題と社会民主主義』丸山敬一他共訳、御茶の水書房、2001年

論文

1. 「第一次大戦とヒルファディングの帝国主義論」(北海道大学『経済学研究』第26巻第3号、1976年8月)
2. 「ヒルファディングの『組織された資本主義』論」(1)–(4)(北海道大学『経済学研究』第27巻第2号–第28巻第4号、1977年5月–1978年11月)
3. 「第一次大戦前夜のヒルファディング——社会主義と帝国主義」(北海道大学『経済学研究』第29巻第1号、1979年3月)
4. 「ドイツ11月革命とヒルファディングの社会化論」(1)(北海道大学『経済学研究』第29巻第3号、1979年8月)
5. 「オットー・バウアーの『経済領域』論」(北海道大学『経済学研究』第30巻第3号、1980年11月)
6. 「『金融資本論』と『組織された資本主義』論——方法論的考察」(北海道大学『経済学研究』第31巻第1号、1981年6月)
7. 「ドイツ社会化運動とヒルファディング——『経済民主主義』への道」

- (『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第20号, 1982年)
8. 「ヒルファディング『金融資本』概念の再検討」(北海道大学『経済学研究』第32巻第3号, 1982年11月)
 9. 「ヒルファディングの経済政策論——『金融資本論』第5篇研究序説」(『金沢大学経済論集』第20号, 1983年3月)
 10. 「O.バウアー『民族問題と社会民主党』の理論構成について」(『金沢大学経済論集』第21号, 1984年3月)
 11. 「帝国主義論史におけるヒルファディング——星野中・保住敏彦両氏の所説をめぐって」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第22巻第1号, 1984年)
 12. 「若きオットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第22巻2号, 1984年)
 13. 「ヒルファディング『組織された資本主義』論の形成過程——『金融資本論』以後のヒルファディング(1914~1923年)」(『金沢大学教養部論集・人文科学編』第23巻第2号, 1985年)
 14. 「オーストリア革命とオーストロ・マルクス主義——オットー・バウアーを中心に」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第23巻1号, 1985年)
 15. 「オットー・バウアーのソビエト・ロシア論」(北海道大学『経済学研究』第36巻第1号, 1986年)
 16. 「『組織された資本主義』論と『金融資本論』——『資本の集積・集中』論と組織化」(『金沢大学経済論集』第23巻, 1986年3月)
 17. 「ヒルファディング『組織された資本主義』論再考——その学説史的評価のために」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第24巻第1号, 1986年)
 18. 「オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第24巻第2号, 1986年)
 19. 「オーストリア第一共和国初期のオットー・バウアー」(1)(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第24巻第2号, 1986年)
 20. 「ヒルファディング組織資本主義論の問題点——1986年11月20日の『ヒルファディングの会』シンポジウムでのW.Gottschalch教授の報告に対する一コメント」(『金沢大学経済論集』第24号, 1987年3月)

21. 「第一次大戦後オーストリアの財政危機とO.パウアー」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第25巻第2号, 1988年)
22. 「戦間期のパウアーとオーストロ・マルクス主義——いわゆる『パウアー神話』について」(『金沢大学経済論集』第26号, 1989年3月)
23. 「民族概念と民族自決権——丸山敬一著『マルクス主義と民族自決権(信山社, 1989年)によせて』」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第28巻第1号, 1990年)
24. 「オーストロ・マルクス主義とファシズム——オットー・パウアーの1934年」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第29巻第1号, 1991年)
25. 「オーストロ・マルクス主義における資本主義と社会主義——社会民主主義再評価の動きに関連して」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第29巻第2号, 1992年)
26. 「オットー・パウアーのファシズム論」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第30巻第1号, 1993年)
27. 「オットー・パウアーの民族概念——マルクス主義民族理論の反省」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第30巻第2号, 1993年)
28. 「ベルンシュタインの生涯と思想」(『情況』1995年1月号)
29. 「ヒルファディングの自由貿易政策論」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第32巻1号, 1995年)
30. 「第二インターのマルクス主義者たちと戦争」(『情況』1998年3月号)
31. 「ウィーン1996年——『EU選挙とオーストリア』と『オットー・パウアーのウィーン』」(『金沢大学経済論集』第38号, 2001年3月)
32. 「オットー・パウアーと民族問題——O.パウアー『民族問題と社会民主主義』に関する一考察」(『金沢大学経済学部論集』第23巻第2号, 2003年3月)
33. 「ヒルファディング恐慌論の意義と限界——『金融資本論』第4篇研究序説」(『金沢大学経済学部論集』第25巻第2号, 2005年3月)
34. 「ヒルファディング経済政策論の再検討——経済学史の視点から」(『金沢大学経済学部論集』第27巻第1号, 2007年1月)
35. 「民族問題思想におけるレンナーとパウアー——オーストロ・マルク

ス主義の民族的自治論を中心にして」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)

36. 「オーストロ・マルクス主義の危機—— 7. 15事件とSPÖの党内論争」(『松山大学千石好郎教授退職記念論文集』2010年2月刊行予定)

研究ノート

1. 「世界大不況下のヒルファディング」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第21号, 1983年)

要約紹介

1. 「<要約紹介>オットー・パウアー著『民族問題と社会民主党』」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第22巻第1号, 1984年)

研究動向

1. 「帝国主義論と修正主義論争」(『経済学史学会年報』第33号, 1995年)

海外報告

1. 「ヨーロッパ・レポート2005.3」(1)(2)(『金沢大学経済学部論集』第26巻第1号, 2号, 2006年1月, 3月)

学会報告

1. 「オットー・パウアーとオーストロ・マルクス主義」社会思想史学会第16回大会, 1991年10月5日(『社会思想史研究』第16号, 1992年)
2. 「オーストロ・マルクス主義と民族問題—— オットー・パウアーを中心に」経済学史学会第59回全国大会第3フォーラム「民族問題と経済学」, 1995年10月29日

翻訳論文

1. 「ヒルファディング『資本主義発展の固有の法則性』」(北海道大学『経済学研究』第28巻第3号, 1978年8月)

2. 「R.ヒルファディング『信用恐慌の諸問題』『社会主義と所有』」(『金沢大学教養部論集・人文科学篇』第21号, 1983年)
3. 「オットー・パウアー『オーストリア諸民族の自決権』」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号, 2009年12月)

書評論文

1. 「民族問題の現代的視座 —— 加藤一夫著『歴史の転換と民族問題 —— ナショナリズム・ルネサンスの時代』を読んで」(『情況』1993年11月号)
2. 「ヒルファディング研究の新展開 —— 黒滝正昭著『ルードルフ・ヒルファディングの理論的遺産』の意義と問題点」(『宮城学院女子大学研究論文集』第81号, 1995年6月)

書 評

1. 「松葉正文著『金融資本と社会化 —— ワイマル初期ドイツ金融資本分析』」(『立命館産業社会論集』第21巻第2号, 1985年9月)
2. 「保住敏彦著『ヒルファディングの経済理論 —— 金融資本・帝国主義・組織資本主義をめぐる』」(『社会思想史研究』第9号, 1985年)
3. 「倉田稔著『ウィーンの森の物語』」(小樽商大『人文研究』95輯)
4. 「保住敏彦『社会民主主義の源流』, 世界書院, 1992年」(『経済学史学会年報』第31号, 1993年11月)
5. 「伊藤成彦著書『ローザ・ルクセンブルクの世界』」(『社会思想史研究』第16号, 1992年)
6. 「河野裕康『ヒルファディングの経済政策思想』」(『経済学史学会年報』第32号, 1994年)

辞 典

1. 『経済思想史事典』有斐閣, 2001年, 「オットー・パウアー」, 「経済民主主義」の項目。
2. 『哲学・思想翻訳語事典』石塚正英他編, 論創社, 2003年, 「革命」の項目。